

2003 年度卒業論文添付資料 全文訳

8500185 八木下 春南

目次

『アレムダーには蛇がいる』 <i>Alemdağda Var Bir Yılan</i> (1954) より	
そんな物語 “Öyle bir Hikâye”	1
孤独が創り出した人間 “Yalnızlığın Yarattığı İnsan”	8
パンチヨの夢 “Panco’nun Rüyası”	15
ヤニ・ウスタ “Yani Usta”	18
頭と瓶 “Kafa ve Şişe”	21
私は街へ出られない “Çarşıya İnemem”	24
蛇の眠り “Yılan Uykusu”	29
『砂糖は少なめに』 <i>Az Şekerli</i> (1954) より	
毛布 “Battaniye”	33
カリニヒタ “Kalinikhta”	36

< 参考文献 >

Sait Faik Bütün Eserleri 7: Alemdağda Var Bir Yılan / Az Şekerli, Bilgi Yayınevi, On İkinci Basım: Kasım 2001 (Birinci Basım: 1970)

A Dot on the Map: Selected Stories and Poems, Ed. Talat Sait Halman & Jayne L. Warner, Bloomington, Indiana UP, 1983, Vol4. of *Indiana University Turkish Studies*

そんな物語 “Öyle bir Hikâye”

映画館から出るとまた雨が降り始めていた。どうしたらいいんだ？私は毒づいた。罵り毒づいた。歩きたかったのに……。1人の運転手が

「アティカリ！アティカリ！」と叫んだ。

夜のこんな時間にアティカリへ行くというなら行くとしよう。私は助手席に飛び乗った。坂を上ったり下ったりしながらまっすぐ進んで行った。曇って水滴のついた車の窓ガラスに映る赤、黄、緑の様々な光を眺めながら、色の波が押し寄せるアティカリに到着した。

シシリのボモンティ停留所から百歩行った所が私の家だ。私は布団が2枚重なったベッドの中にうずくまり我が友パンチョのことを想う。今のところ私には他に誰もいない。イスタンブルの島の1つに病気の母が布団に横たわっている。私の黒い犬はベッドの下で私と彼を待つ。パンチョはチレッキという名の通りに住んでいる。彼は夢の中でサッカー観戦やトランプをする。私は真夜中過ぎに雨の降るアティカリにいる。多分並木通りに立っている。私は歩いて行く。雨が降っている。そうだ、雨や孤独、アティカリこそが真実なんだ。遠ざかるにつれ母が、パンチョが、犬のアラブがますます恋しくなってきた。

3人とも眠っている。母はいびきをかいている。アラブは目を覚まして通りに耳を澄ましている。パンチョは夢を見ていない。今しがた私が払いのけたから。

私は2人の人間と1匹の動物のことを想いながら雨の下、アティカリの見知らぬ通りを曲がっている。警笛の音が聞こえてきた。ある家から狂ったように誰かが飛び出してきて、私にすがりついた。

「恋人を殺しちゃったんだ！俺をかくまってくれ」と彼は言った。

私はコートのポケットを示した。縫い目から雨が入り込み、朝に食べたスイミットのゴマの匂いがするポケットを。男はポケットの中に入り見えなくなった。

「お前の名前は何だ？」と私はポケットに話しかけた。

「ヒダーイエット」

「なんで殺したんだ？」

「愛していたからさ！」

「どんなふう？」

「気遣いみたいによ！あいつと一緒に夜が明けたもんさ。俺は昼間スサム・ヘルワを売っているんだ。あんたのポケットはスイミットのいい匂いがするな。あいつと一緒に夜が明け、日が暮れたんだ。あいつのことを想わない時はなかった。兄さん、夢のような暮らしだったよ。どんな言葉を交わすにもあいつに頼っていた。人が俺に何を言っても、あいつならどう答えるだろうかと考えた。何を買おうとしても、あいつなら買うだろうかと考えた。何を食べてもおいしくなかった。誰かが道を尋ねてきて、あいつなら教えただろうかと自分の頭に聞かなかったり、心の中であいつが道を教えなかつたりしようものな

らぼんやりとしちまったもんだ。きれいなものを見てもあいつに見せることができないと、そのせいできれいなものを喜べなかった」

「彼女の名前は何というんだ？」

「パーキゼ」

「それで？」

「それで……夕暮れになった。スサム・ヘルワをカフェに預けて、ワインを2杯飲みに行った。くそつたれの居酒屋店主か誰かが阿片を加えたのか知らねえけど、飲むといきなり目の前に正真正銘生身のパーキゼが現れたんだ」

「本当に？」

「嘘や幻じゃねえぞ！だいぶしゃべり続けちまったな」

「しっ、人が来るぞ」

ヒダーイエットは、コートのポケットの中でゴマ粒みたいに身を縮めた。

雨が止んだ。辺りは少し明るくなったようだ。ヒダーイエットがポケットから言った。

「続きを話そうか？」

「いや、この位で十分だ」

「いいよ、黙っとこう。好きなようにすればいいさ。だけど俺のことをパンチョに話してくれるかい？」

「話すとも」

「でもこの続きはもっといかしてるぜ」

「続きは私がでっちあげる。ポケットから出てくれ。コートがびしょ濡れた。お前たち2人を一度には運べないよ。私は疲れた」

「分かったよ、兄さん」

ポケットのゴマがノミになった。ファーティフ・ジャーミーの中庭にある榎の下に向かって飛び出していった。暗闇で一筋の光が不吉に閃いた。

私はほっと息をついた。気が楽になり、機嫌が良くなった。パンチョに徹底的に物語を話して聞かせるつもりだった。ヒダーイエットはパーキゼの心臓に一突きで大きな釘を刺し込んだ。他にどうしようもなかった。スサム・ヘルワを食べる子供や女たちはヒダーイエットにこんな物語を期待していなかった。スサム・ヘルワでは腹を一杯にできなかった。パーキゼは「スサム・ヘルワ売りとは一緒になれないわ」と言った。愛していたのに……。愛で空腹は満たせない。ヒダーイエットはその晩着飾ってタクスイムへ出かけた。18 リラ 37 クルシ¹_{分の1} [クルシ=100 リラ]の金を持っていた。居酒屋へ入りひたすら飲み続けた。飲んでヒダーイエットに酒が注がれた。雲一つない月明かりの夜にミナーレのアーレム^{【ミナーレなどの頂きに付ける金属製の飾り】}が空へ向かって聳えるのを、もう彼はパーキゼと一緒に眺めることはないのだ。「この道はフルカイシェリフへ行きますか」とある婦人が尋ねてくると、ヒダーイエットは頭の中で黄色いウールのセーターの下に隠れたパーキゼに同じ質問をする。彼女が「この道なのか

あの道なのか、あたしには分からないわファトマ・ハヌム！」と答えたから、彼も婦人の戸惑った顔に向かって微笑みながら同じことを言う　なんてこともないんだな！羽毛、猫、清潔なガーゼ、ハンカチのように匂い立つパーキゼの膝に頭を乗せることもできなくなっただのか？

おい、その釘を誰が彼のポケットに入れたんだ？あの悪ガキのアブドゥッラーじゃないか？あの少年　あのそばかすだらけの浅黒い顔で、鼻ぺちな、カラカプラン・クラブ所属センターハーフのアブドゥッラー。彼が釘を入れたに違いない。映画館の半券、スタジアムの半券、歯ブラシ、自在スパナ、壊れたエール錠、鯨蠟、チューインガム、うじの湧いたサクランボ、石鹼、スイカやメロンの種、タマネギやニンニクを入れる悪ガキが何でまた釘を入れたりしたんだ？大きな基礎用の長釘。ピカピカで突き錐みたいに細長い...。パンチョに話す物語ができた。

「真夜中にこの辺に何の用だ？」

「友人の所を訪ねて、そこから帰るところです。遅くなってしまいました」

「住所は？」

「シシリです」

私は体を調べられた。鉛筆の外に67リラ30クルシの金があった。短編小説の原稿、パンチョの写真に鉛筆がもう1本。

「身分証は持っていないのか？」

「持ってません！」

「職業は？」

「物を書いています」

「どんな書類だ？事務員か？」

「ええ」

「勤務先は？」

「コジャエリのイクバル倉庫です」

いきなりどこから思いついてコジャエリのイクバル倉庫なんて言ってしまったのか？

「さあ、行った行った。いい年して夜中にうろうろするな」

私はファーティフ公園のはずれを歩いているよ、パンチョ。男が1人水浸しの所に座っていた。足をまっすぐ揃え、頭を公園の鉄柵にもたせかけていた。

「民主主義万歳！国民万歳！共和国万歳！」と彼が叫んだ。

「同胞万歳」と私は言った。

「隣に座れよ」

私は座った。ああ！本当に楽になった。濡れていて寒々としている。

「俺にゃあ女房がいるのさ。あいつの面を見たらひと月は逃げ出しちまうね。娘が1人いる。アッラーがあんたみたいなのに巡り合わせてくれりゃいいんだが。結婚しているか

い？結婚しているなら離婚してうちの娘をもらってくれ。片目がめくらで、もう一方の目は創造主を睨みつけている。鼻が1つある。鼻をかむのにハンカチじゃ足りない。鼻汁が匂うし、あいつ自身が匂う。あいつの側には近寄れない。生理の匂いがぷんぷんするんだ。息子が1人いる。19才で、小便臭い。足が臭くて、煙草臭い。家はといえば、くわばら

便所臭いのさ。偉大なるアッラーよ！この石を見な。洗えばピカピカだ。この緑に塗られた鉄柵を見ろ！きついが何ともいえぬペンキと雨の匂いがする。この芝生。あの雲あの黒、黄、赤、金、こげ茶の色に変わって通り過ぎる雲を見ろ！この、俺の目の中で点灯しては大きくなって、きらきらと輝き、矢のように鋭く消灯する街灯を見ろ！あの隅々まで洗われたアパートを見ろ！寒かったり雨だったりは大したことじゃない。とても清潔で真新しい光や水、雲に包まれた宇宙の下で俺は寝るんだ。頭を鉄柵にもたせかけている。足がびしょ濡れだからどうだっていうんだ？宇宙は俺の頭上で考えも及ばない物語を繰り広げている。蒸気が雨水になる。雨水はぬかるみや汚物を洗い流す。芝生を青々とさせ、木を木たらしめる。家に何の用がある？あんたもここにいろ。家に帰るな。ここで横になって眠ろう。おっと、まずは煙草で一服しよう。マッチ棒の燃えるもんかとしゅうしゅう音をさせて、後になってよきた燃えようと言ってくるこのマッチ棒の光を見る。こんなことがありえるのか？こんなふうに手を滑らせるだけで生まれる熱、光、お祭り騒ぎを見たことがあるかい？笑って喜べ。この口から出る煙を見ろ！飛んでいるぞ。あんた生きてるんだよ、旦那。ピカピカ、きらきら、つやつやと。ガラス、水晶、ほんほりみたいに生きてるんだよ。俺たちが出す煙 煙草の煙を見なよ！この青いものは何だ？この人間の心を喜びや楽しさで輝かせるものは何なんだ？女と寝ること、仲間とトランプすること、芝居や映画を観ること……全て忘れて世界を眺める。信じてくれ。ほら、あんたの前にマッチの炎が、煙草の煙があるぞ！さあ眠ろう、同胞。

なあ、眠る前にパンチョに俺のことを話してくれよ。ファーフ公園の鉄柵にもたれて眠る男を、煙草の煙を。パンチョはいい奴だ。本当にいい奴だ。俺からよろしく言っといてくれ」

この靴を買って良かった……。幸い靴に水がしみてこない。私の周りは水浸しだ。でも足は暖かい。「煙草の煙、恋人は残酷。金の別荘、銀の階段を建てた」と誰かが大声で歌いながら遠ざかっていくと、私の後ろから男が叫んだ。

「万歳！見たかい？世界はあったか。パンチョの友人！ファイク・ベイの息子」

ゼイレッキの壁の上に私は座った。目の前にはヴェファーがある。アタテュルク通りは人っ子1人いない。風はゴールからゴールへと雲を飛ばしている。サッカーの試合万歳、と私は言った。さて、壁のどちら側から降りたものか。ブルサで生まれて初めて大麻を吸った。イエシル・ジャーミーの中庭にある壁の上に座ってニリュフェル平原に捧げる詩を作っていた時、どこから降りればいいのか分からなくなった。通りかかった男を呼び止めて、「僕はどこから降りたらいいんでしょうかね」と尋ねてみると、男は私の目を恐怖とと

もに見つめた。そして微笑みながら私の手をつかんで降ろしてくれた。学生帽のひさしに目を据えて、

「もう二度とやるなよ若造。降りるのは簡単だ。誰かが来て降ろしてくれるんだから。だが後でまた上ろうと思うようじゃ懲りてないな！」と言った。

今となってはこんな物は常用していないが、その時以来久しぶりに壁に上るとしよう。いつも降りる道筋を忘れてしまう。

パンチョ、全部君が悪いんだ。君が私にこんなことをさせたんだ。真夜中、君のために私は歩き回っている。君がこんなことをさせたんだ。

見ると、ゼイレッキの坂の壁のふもとで犬が1匹眠っている。私は隣に座った。犬は目を開けて、きょろきょろ見まわした。私が恐る恐る頭を撫でると目をつぶった。私は彼に長々と演説をぶった。

「おい出目。私は人間で、お前は動物だ。今から何百万年も前には我々は2人ともうじ虫だった。ミミズだった。単細胞生物だった。その前は真空の塵だった。そしてほら、こうして今の状態になったんだ。これからはこのままかもしれないし、変わるかもしれない。だがこのままでいるのはよそう。お前たちも私たちも不運だ。家で眠る者、絹をまとって眠る者、女を抱いて眠る者、ストーブの側で縮こまっている警官がいる。ゴム製の骨やボールがある。婦人たちが投げると奴らは走って取ってくる。朝、門番たちは散歩に出る。愛するものを今まさに胸に抱き2人だけの夢に耽る人々がいる。それはそうと我々はどうすればいいんだ？けれどお前は尻尾も毛もなく、疥癬病にかかった、ゼイレッキの坂で寒さに震える野良犬だ。私はパンチョの友人だ。他の何者でもない。雨に打たれ、眠れず疲れきった、心はアアチチレイの通りに、頭はボモンティ停留所から百メートル離れた汚ない枕の上にある1人の男だ。どうしたらいいんだ。いつの日か友情、人間、動物、木、鳥、野原からなる、義務感で鼓動する心に満ちた世界に生きられると信じよう。我々には道徳というものがあるが、一度も本に書かれたことはない。我々が道徳、今日私たちのしてきたこと、するであろうこと、考えてきたこと、考えるであろうことを当惑しながら見つめる我々が道徳。それならばお前とずっと長く友好を保つとしよう、出目よ。だから心配無用だ。我が友パンチョは私が正しいと認めてくれるだろう。彼はキリスト教会の道徳を語ったりしない。友情のとてつもない素晴らしさを奴らに語って聞かせてくれるだろう」

アタテュルク橋で男に出くわした。金角湾に向かって嘔吐していた。私は男の側に立ち止まった。男は飛び跳ねるように2、3回靴のつま先で立ち、伸び上がった。そして止めた。私はハンカチを出して男の顔と口を拭き、目にかかった髪を手でかきあげた。顔が私の方を向き、2つの大きく黒い瞳が親しげにこちらを見つめた。

「飲み過ぎちまってね」

私は余計なことは言わなかった。

「そうだろうとも。ついつい飲み過ぎてしまうものだ」

「その通り。あんたも俺の仲間みたいだな」

「ずばりそうだ」

「たくさん飲んだのかい？」

私は口を堅く結んで右手を空中で軽く2、3回振った。パンチョ、君もこうしてみる。どうの意味が分かるだろう。

「見るからに分かるよ。顔に光が残ってないもの」

私は怒った。

「光は心の中にあるんだ。私の心はピカピカだ。愛や友情に満ちているんだ。少なくとも今夜はな。顔の光を見るな。嘘つきで人を騙すんだ」

「そんなふうにするのかい？」と男が言った。その後ろを「そんなふうに言われるのかい」太っちょ花嫁って、こんなふうに言われるのかいと歌いながら誰かが遠ざかっていくと、私は男を捕まえた。

「だめだ、放さないぞ。どこで飲んだか言え」

「どこでだっていいだろ旦那。放してくれ。こんな真夜中に、後生だから。もうしらぶに戻った。帰って寝るよ。明日早くに車を走らせるんだ。俺が起きなかったらじじいにどやされちまう。そうだな。ほら、あの向かいの家に人妻が住んでいるんだけど ユダヤ人の女なんだ。旦那がアンカラに行っちゃったんで、彼女は俺を呼んだのさ。行って一緒に飲んでると奴さん真夜中にひょっこり帰ってくるじゃねえか。凶々しい男でさ、俺たちを目の前にして一言も話さずに隅っこに座っちまった。女房の方も厚かましくて、まるで部屋に誰もいねえみたいにまず俺に、次に自分に、そして旦那にラクを差し出してきた。俺たち3人とも無言でさらに7杯ずつ飲んだんだ。『そろそろおいとまするよ』と俺が言うと、女房は『ええ、お気をつけて！』と言った。すると奴さん真っ青な顔して完璧なトルコ語で『乾杯！』と言ってきやがった。俺はずらかったけど、あのあと家はどうなっちゃったんだらうな」

「何てこった！」と私は言った。

「そっ、何てこった！」とやくざな若い男前の御者は言った。

私たちは2人ともアタテュルク橋を反対側から金角湾の対岸まで大股で歩いて行った。

アザックプにさしかかった頃、私はウンカパヌから彼の叫び声を聞いた。

「何てこった！」と叫んでいた。

さあ、こうして君たちの街に来たよ、パンチョ。雨がまた降り始めた。ちょうど君たちの家の前に壊れた甕があった。半分こなごなで、半分無事だった。私は甕の中に座り、語り始めた 真夜中アティカリパシャへいかにして行ったかを、ヒダーイェットが私のポケットの中へいかにして入ったかを、ファーティフ公園で寝る男、野良犬、ユダヤ女の間男の御者のことを。

君は眠っていた。

「おいパンチョ、パンチョ！」と呼びかけた。

私の声は窓を貫いて君の耳に届いた。君は目を覚ました。しかし、もう私には君にまで届くほどの声も力も残っていなかった。君は再び眠りについた。自動車が1台通りかかった。

「ボモンティまで行くかい？」と私は聞いた。

「乗りな！」

私は乗った。

孤独が創り出した人間 “Yalnızlığın Yarattığı İnsan”

コートの襟を立てたので、寒くなったのかと思って彼を見た。もともと血の気のない褐色の顔はひどく青ざめていた。

「寒くなったのか」と私は言った。

彼は眉を持ち上げた。頬の腫れたところには血が通っていなかった。私は立ち止まって彼の顔を両手でつかみ、擦った。

「何でこうなったんだ？」

彼は笑い、暗闇に向かって唾を吐いた。頭を左右に激しく振った。

「時々こんなふうになるのさ！」と彼は言った。

「どこかに入ろう」と私は言った。

「いいよ。いいけど、もう飲むのはよそう」

「飲もうじゃないか」

「あんた死んじまうよ！」

「死ぬさ」と私は言った。

私たちは手に持ったグラスを見た。彼の顔はとても物憂げで静かな褐色だった。まだなお血の気がなかったが、生き生きしていた。

「あんたの顔は疲れきっているね」と彼が言った。

「疲れきっているんだ」と私は言った。

彼はピスタチオを食べビールを飲んだ。私もピスタチオを食べビールを飲んだ。耳の中で何か音がして気絶しそうになった。彼はじっと私を見ていた。

「あんたすごく年取ったね」と彼が言った。

「年を取ったんだ」と私は言った。

私の髪の毛を見た。私の目を見て笑った。

「放っとけ」と私は言った。「おい、見るなよ！」

彼は暖かくなったのか毛皮の襟のコートを脱いだ。

「コートの襟は毛皮だ、コートの襟は毛皮だ」と私は心の中で呟いた。心の中で誰かが「だから何だっていうんだ？」と言った。いずれにせよ、私も1つああいうのをあつらえらるしよ。

「君とはもう会えないのか」と私は言った。

彼は怒った。

「それは僕の勝手だろ！」

2日後、私は20人に「それは僕の勝手だろ、とはどんな意味だろう？」と尋ねた。誰一人として正しい答えが出せなかった。

まだ2日は経っていなかった。私たちはまだピアホールにいた。私は周りを見ていなか

った。彼のことも見ていなかった。私たちは宙を見つめていたのか？私は物思いに耽っていた。

「さあ立って、行こう」と彼が言った。

「どこへ？」と私は聞いた。

「試合に」

「試合だって？こんな時間に試合があるのか？」

「ヨーロッパには夜試合があるだろ！」と彼は言った。

私は「ここにはないぞ」とは言わなかった。私たちは出発して、坂を下りた。ある所で立ち止まった。彼は服を脱ぐと、下の階段の側で薄明かりの中プレーするサッカー選手の中に混じっていった。声を聞いた。ホイッスルや罵声が聞こえた。辺りを見回すと何千人もの人間がいた。

しばらくして彼が私の所にやって来た。

「君もプレーしているのかい？」と私は聞いた。

「寝ぼけたこと言うなよ」

「えっ、じゃあ私は何をしているんだ？」

「あんたもプレーしているんだよ」と彼は言った。

「私もプレーしているって？私は何をプレーしているんだ？」

彼は笑って歯をのぞかせた。歯が1つ欠けていた。

「あんたは」と彼は言った。「観客をプレーしているんだ」

「えっ、本当に？」

私は観客をプレーしていたのだ。私は足踏みしたり手を叩いたりし始めた。寒くなったのでコートの際を立てた。彼と同じような羊の毛皮を私も付けてもらおう。私の頬に毛皮のひんやりとした感触が伝わった。

もう私は動かなかった。観客たちはいなくなっていたし、サッカー選手たちも消えていた。しばらくして彼が私の所へやって来た。

「試合は終わったよ」と彼は言った。

「良かったな」と私は言った。「どこが勝ったんだ？」

「別のチームさ！」

「じゃあ、だめだったんだな！」

「あんたはどこが勝てば良かったんだ？」と彼は言った。

「私たちのチームだよ」

「私たちってどこのこと？」

「君たちさ」

「僕たちだって？」と彼は言った。「僕たちに勝って欲しかったのかい？」

「当然だろう！」

「どうして？」

「相手チームには知り合いが1人もいなかったからな！」

「僕たちのチームにはいたのかい？」

「君がいただろう！」と私は言った。

「馬鹿だな」と彼が言った。「僕はいなかったぜ」

「私は君を見たんだ」

「僕は何をしてた？」

「バックだ！」

「本当に見てみたいだな」と彼は言った。

「誰かが君を転倒させただろう？」

「ああ」

「君はびっこをひいている」

「そうとも。だがあんたには関係ないだろ？」と彼は言った。

「ああ、全く関係ない」

私の心は痛んだ。

突然彼を見失った。私は呼びかけた。

「パンチョ、パンチョ！」

何の返事もなかった。

誰かが暗闇で私の名を呼んだ。

「イスハク、イスハク！」

私は答えなかった。その声は彼の声ではなかったからだ。けれど、後になってひょっとすると友人のことを聞けるのではと思い、

「どうしたんだ？」と私は聞いた。

「イスハク、イスハク！」と声はまた言った。

「一体どうしたんだ？私はここだ！」

「私の方に近付いてくる足音があるぞ！」

彼の隣には3人の若者がいた。1人は背が低く、アルメニア人の顔をしていた。もう1人は徳利のジャケットを着ていて無表情だった。3人目はのっぼだった。彼らの間では、何千回と耳にしたことはあるが意味の分からない言葉が交わされていて、私には何を話しているのか理解できなかった。

彼らの後を私もついて行き、坂を上った。大通りに出た。通りはアスファルトだった。光に包まれていて、地面は濡れていた。雨は止んでしまっていた。

「雨が降ったみたいだ」と私はひとりごとを言った。

彼らを見失った。映画館の切符売り場に私はいた。彼は扉の所で待っていた。友人の1人が切符を買っていた。背の高い男と、徳利のジャケットを着た男はにやにやと笑ってい

た。彼は褐色で、静かで、物憂げだった。こっちを見たりはしなかったが、私のことを気にしているようだった。

私がいることに気付かせようとした。私も切符を1枚買った。彼らは前方の席に座った。私は隅っこに立っていた。彼が暗闇の中で左右に身じろぐのを見た。前に座っている男と一緒に彼も左右をきょろきょろしていたが、しばらくしてだいが落ち着いた。頬杖をついて見入っていた。そして、座り直すと爪を噛み始めた。人込みの中をコートを着た40代の男が叫んだ。

「爪を噛むな！」

彼は微笑んだ。灯りが点くと、3人の友人たちは姿を消していた。前の席にいて爪を噛むなと言った男が彼の隣に来て座った。

何かを話していたが聞こえなかった。毛皮の襟を付けた昔からの友人は、コートの袖からマフラーを取り出して首に巻いた。私は彼の黒髪を見つめた。彼は振り返ったが私に気付かなかった。石や壁を見ているみたいだった。

「私だ。おい私だぞ。君の友人イスハクだ！」と叫ぶために口を開いた。

映画館の重苦しい空気は私の肝臓に水のように満ちた。私は口をつぐんだ。彼らは出ていき、照明に照らされた街を歩いていった。私は彼らを後ろから悲しく眺めた。一人ぼっちになってしまったみたいだった。よく彼と喋りながらレストランに入ったものだ。レストランの店主は女性だった。彼女の頬には黒子があった。彼女はいまだに少年時代に出会った幼い少女のようだ。私はたちまち20年前に戻ってしまうのだった。

病気になって40度近い熱が出ると、私の手は大きく腫れ上がり巨大な手になる。子供時代によくそうだったものだ。

「手が大きくなっていくよ」と私は言った。

祖母や母は私の両手を冷たい手で包んで言った。「何でもないので、坊や！ほら、私の手の中にあなたの手があるでしょう」それでしばらくの間は落ち着いたが、また私の手は大きくなりだした。

手が大きくなったのだ。ものすごく大きくなったのだ、おお神よ！通りに出ると寒さで手が縮んだ。私は大通りにいた。何千人に対して1人だった。何万人に対して1人だった。

「パンチョ、パンチョ！」と心の中で叫んだ。

時計を見ると9時45分だった。大通りは人気なかった。映画は上映されていなかった。酔っ払いたちが私にぶつかってきたので彼らの間を蛇行してぐり抜けた。皆パンチョに似ていた。皆サッカー観戦に向かっていた。私はコートの毛皮の襟を立てた若者の跡をつけた。

襟をつかもうかと思った。「試合を見に行こう」と言うつもりだった。

いや、それはよそう。君をあのドイツ料理店に連れて行こう。ポテトサラダが出るんだ。あとシュニッツェルも食べるかい？

あの仲見世のビアホールにもう一度行って、あのテーブルに腰掛けたなら、男女連れ立った人々がやって来て座るだろう。私は1人だ。何百万人の中で1人だ。苦しみは次第に増していく。メロンのにがさのような、にがい苦しみだ。失ってから気付く何かだ。それは何だ？一体何なんだ？

失わなければ気付かないものなんて君には分かりっこなかった。窓から誰かがこっちを見た。なぜ見たんだ？目を閉じてくれ。君の手は大きくなっているか？いいや大きくなっていない。大きくなっていやしないんだ、万歳。でも痛いだろう。いや痛くなんかない。嘘をつくな。君の心に何かがあるような気がしないか？嘘っぱちだ。きっと何かの本で読んだのだろう。または誰かが言ったりしていたことを覚えていたんだ。君の心には何もない。孤独。孤独は素晴らしい。いいや素晴らしいくない。メロンのような苦しみだ。メロンのような苦しみて何なんだ？

ある男が焼き立てのボレッキを注文した。彼がいたなら今食べたろう。どんな食べ方をしていたかは覚えていないが、彼のコートの襟は羊の毛皮でできていた。頬には小さな昔の腫れた跡があった。皮膚の下に血が通っていないみたいに生氣のない褐色をしていた。髪は黒く、目も黒かった。それがどうした？髪や目が黒くなくても、生氣のない褐色の肌が私は好きだ。もっとも他の人間にそれを認めても好きになったりはしないが。

私は星を見た。星だって？ビアホールに星があるのか？とにかく私は星を見た。私は映画館に飛び込んだ。先日彼は大通りを走っていた。4時45分だった。昼の上映に遅れ、大急ぎで彼は映画館に入っていった。私は後ろから見つめ続けた。中に入ることはできなかった。彼は強情を張っていて口をきいてくれない。ひとことも話さない。その時だ。その時、もくもくと湯気の出ている場所に入ってしまったみたいに汗が出てきた。そして私の上に雪がはらはらと降ってきた。雪がはらはらと。ピストルにしようか、ナイフにしようかと考えた。ナイフは嫌いだ。ならピストルだ。私たちの頭には小さな穴が1つある。周りの黒い奇妙な穴だ。血が少し滲み出ている。頭の穴は塞がれたようだ。膿のようなものが流れ出ている。

これが彼にとって何だというのだ？これは私の頭にできた穴だ。彼にも空けるべきか？空けなければなるまい。孤独から他にどうやって脱け出せるのか？死ぬことだけなのか？いいや、百万という人間の中には死者が2人、3人、4人、5人。死者を数えるのはやめよう。これで5杯目のビールだ。このビアホールのことも窓の外のことも忘れろ。彼は来ないのだから。ああ！私たちは本当は映画館にいたのだ。空飛ぶ円盤から出てきた男は、小さな警官の懐中電灯を奪い通りに出た。子供も後ろからついてきた。

空飛ぶ円盤を2人の見張りが待ち受けていた。空飛ぶ円盤の前にいるロボットは直立姿勢だった。

彼は毛皮のコートを脱がなかった。毛皮はまだ涼しかった。彼は腫れた跡のある頬を涼しさに任せた。毛皮の唇が彼にキスした。彼は驚いて飛び上がった。私を思い出したらし

い。身震いしていた。テーブルの上には石膏の船乗り像があった。私はそれをはるばるヨーロッパの都市の祭りですて入れたのだった。像の下に金を置いたものだ。

「船乗りはお金をくれたかい？」

「くれたとも。船乗りに感謝するよ」

「船乗りに感謝だな！」

夏の日、彼が隣で寝ていると私は心地よい眠りについた。夢は何一つ見なかった。何一つだ。虚無ほど素晴らしいものがあるだろうか？あったとしても知っている。このご時世に虚無は死のように美しい。

別の惑星からやって来た男はタクシーから飛び降りた。全軍隊が跡を追いかけた。攻撃命令が下り、彼は撃ち殺された。兵士たちが彼の周りを取り囲んだ。

彼の来るのが遅くなった時、私はいらいらした。階段の足音が別人のものだと分かって荒れたものだ。そして突然彼の足音が聞こえてくる。ドアは開けたままにしておいた。彼は別の惑星から来たみたいにやって来た。私は目にキスをした。

出なくては。ここから出て行かなくては。映画館は終わった。私は自分の運命と自分自身を背負って通りを歩かなければならない。街の中へ入って行かなければならない。家々を、真夜中過ぎにかすかに灯りのともる窓を見なくては。瓦礫の上に座り夜警が現れるまでこの2番地の家をよく見ておかななくてはならない。3階のバルコニーには植木鉢がある。3階と1階は荒れ果てている。2階は申し分ない。彼はどのあばら家に住んでいるのだろうか？灯りを点けてはいけない。私はゆっくりと廊下を進んだ。

「泥棒だ！泥棒だぞ！」

通りを走って逃げよう。夜警、警察官、警笛が私の跡を追いかけてきた。いや、誰も私の足音を聞かなかった。ある小さな部屋のドアを開けた。そこにある、壊れたベッドの中では片足が外にはみ出していた。いや両足とも外に出ていた。私はその両足を布団の中にしまった。彼は深い寝息をたてている。私の方に寝返りを打った。見ると、顔の片側に腫れた跡がある。不思議な、野性的で、青ざめた顔には優しいピンク色があつた。眉には光沢があり、唇は乾いている。

燭台は今にも火が消え入りそうだ。聖母マリアが震えている。こっちの小さなベッドに寝ているのは誰だろうか？かがんで彼女を見た。とても大きな瞳があり、野性的な肌をしている。彼女は叫ぶことができなかった。

「しっ、静かに！」と私は言った。

幼い少女の口を手で塞いだ。彼女はじたばたした。

「騒がないなら手を離す」

黒い瞳をぱちくりとさせた。私は手を彼女の口から離して、もう一方のベッドの所へ行き座った。彼はまだ眠っていた。目で辺りを見回すと毛皮の襟のコートがそこにあつた。着てみると、手首が外にはみ出した。背を丸めて部屋を歩き回った。幼い少女が私を見て、

手で口を押さえ笑っている。私は瓦礫の上から離れて歩き出した。大通りには今酔っ払いやぼん引きなどがあるだけだ。皆愉快的な男たちだ。皆、それぞれ運命と自分自身を背負っていた。彼らは女と寝る時でさえ孤独だ。開いている所を見つけてビールをもう一杯飲もうか。だめだ、どこも閉まっている。

彼はまだ眠っていた。眉には光沢があった。寝息のする方へ顔を持っていった。頭の下に敷いてある2つの枕のうち1つを抜き取って、彼の足元に置いた。そこへ私もうずくまって横になった。私の手がどんどん大きく、大きく、大きくなっていく。

パンチョの夢 “Panco'nun Rüyası”

家の中で不思議なことが起きていた。一見すると声、呼び声、食事の時間、その上顔ぶれまでもがいつも通りだった。もし家具が全部変わっていたり、声が小さくなっていたり、食事の時間が変わっていたりしてくれていたなら、全てがいつも通りであることまでを邪魔するこの雰囲気はなかっただろう。そうなると人はテーブルやコップ、腰掛が定位置に収まっていることを期待するものだ。いや、それどころか全てがあるべきところにあった。僕の妹は朝、同じ時間に起きて、同じ時間にお茶を沸かす。妹の弁当箱に入れるパンの匂いがベッドの中にまでしてきた。ストーブの傍にたちこめる小さく穏やかで控えめな、愛すべき朝はいつもと同じだった。父さんが言った。

「そろそろ起きて服に着替える……」

洋筆笥の上の時計が8時34分になると母さんが僕に声をかけた。

「さあパンチョ、父さんはもう仕度できているわよ」

僕はいつものようにいびきをかいて左右に寝返りを打つ。目を開けてあれやこれや、友達のこと、昼休みのこと、晩に行く映画館のことなんかを考える。

今度は父さんにどやされてしまった。

「パンチョ、出来損ないのパンチョ！怠け者のパンチョ！遅刻しちまうぞ」

出来損ないや怠け者という言葉に込められた親しみを、僕はいつも感じ取る。

僕は21才で、父さんは40才だ。僕たちは兄弟みだ。時々僕より父さんの方が若く見えることさえある。父さんは大工で、僕は電気技師だ。ベイオールのぬかるんだ裏通りに僕らは住んでいる。夕方、仕事が終わるとすぐに僕は大通りのカフェに駆け込んでギャンブルをする。父さんは知っているけれど気にしていない。1週間分の給料を1日で全部使い果たしてしまうこともある。そして僕はまた勤勉に働く。ただ、朝はこんなふうになんとも起きることができない。

以前、僕たちは失業した。これは何ヶ月も続いた。ちょうどその時あなたが僕を助けてくれた。

妹のノートや本をあなたが買ってくれた。僕の手首にある腕時計はあなたのものだ。今着ているシャツもあなたに買ってもらった。

あなたがくれた数クルシはギャンブルで数リラになった。そして僕は今言ったものを買に行った。父さんは、知っているいくつかの店で数クルシの仕事をしている。僕は10時頃に起きてカフェに直行する。父さんはこのことを知っているけれど何も言わない。この奇妙な、働いていた時とはだいぶ違う贅沢な雰囲気に眉間に深い皺を寄せて耐えていた。けれど、父さんは大好きだった歌を一日として歌わなくなった。

パンド マジ

タ ヴリ ストマス

バンド マジ

家の雰囲気がかこうした日々が変わったとあなたは思うかい？いいや違う。多分家にはかすかな沈黙が生まれたと思う。けれど僕は相当に愉快で幸せだったから家族の沈んだ様子なんか気にならなかった。僕は夜遅くに帰った。あなたと劇場やなんかに行ったり、トランプに加わったりして遅くなった。でも例え何時であっても、家に帰って火の消えた火鉢や両親と妹の寝息から生まれた空気に触れると、いい気分になってすぐ眠れてしまう。眠る前にしばらくあなたのことを考える。あなたは素敵ないい人だ。けれど、僕をおかしくさせる何かがある。それが何なのか僕には分からない。先週ある夢を見た。2人の人間が道を歩いていた。1人はあなただと思った。隣にいるのは誰だろうかと追いかけて見た。奇妙なことに隣にいるのは僕じゃないか！

「ねえ、どこに行くんだい？」と僕は目で訴えた。

あなたは答えなかった。僕は、僕ではない別の僕に違いなく、これは夢の中だけで可能なのだと思った。何か言いたかった。でも、あなたと一緒にいる僕が言った。

「お前には関係ない。僕たちがどこに行こうと勝手だろう」

僕は返事がしたかった。もう1人の僕は話すことができるのに、僕はできなかった。夢の中で、自分が夢を見ているのだと分かった。力を振り絞ってついに叫ぶことができた。妹が僕に聞いた。

「どうしたのお兄ちゃん？」

一体自分は何と言って叫んだのだろう？気になって仕方がなかった。

「僕は何て言ってたんだ、カリオピ？」

「分からなかったわ」

こうしてその日の朝、家の中は全ていつも通りで、声も会話も皆同じだったのに、何かが変わった。突然、全てのものが前よりずっと好きになった。突然、僕の心に大きな不安と圧迫感が生まれた。部屋のごちゃごちゃに散らかったものを全て片付けた。7時45分にはストーブの前にいた。父さんはまだ起きていなかった。母さんと妹は僕を見ると、僕が早起きしたことを喜んだ。

「仕事が見つかったの、パンチョ？」と2人は聞いた。

「いいや！」

「それならどうして早くに起きたの？」

僕は腹を立てたふりをして言った。

「そんなことならまた寝てくるよ」

彼女たちは、ぼろぼろのパジャマの垂れ下がった裾をつかんで僕を座らせた。まず紅茶のグラスを手に持たせ、次に白チーズをのつけた焼きたてのパンを一切れつかませた。

妹が母さんに言った。

「ゆうべお兄ちゃんが叫んだのよ」

「叫んだの？何て言って叫んだのかしら？」と母が聞くと、妹は

「分からないわ。でもものすごく叫んだの」と答えた。

父さんが中に入ってきた。父さんは何と優しく立派な男なのだろう。仲間でも友達でもない。父さんは立派な人だった。

「おお！パンチョ！今日は早起きだな」

そう言うと父さんはポケットを探った。

「煙草の箱を上置いてきちまった。持ってきてくれないか！」

僕はすぐに走って行った。自分のポケットの中から、あなたがくれたあの上等な煙草の残りを持って行った。

「おお！この煙草はどこで見つけたんだ？」と父さんが言った。

「友達がくれたんだ」

「そうか！今日は俺について来い。地下室の階段を修理するんだ。お前は薪小屋の電気が故障しているらしいから、そこらへんをやってくれ」

僕たちは一緒に家を出た。途中、あなたに会った。あんなに早くあなたはどこへ行こうとしていたのだろうか？あんまりおかしい顔をしてこっちを見てきたものだから、あなたが遠ざかってからすごく笑えてきた。

「何を笑っているんだ？」と父さんが言った。

「何でもない！」と僕は答えた。

でも、実はあなたのことを考えていた。あなたはまるで昨夜見た夢の僕のようなだった。ただ一つ違うところがあった。あなたは追いかけて来て僕に「どこに行くんだ。私も連れて行ってくれ」と目で訴えることはできなかった。

仕事が終わわり、カフェに駆け込んでトランプをしている時にあなたのことをまた思い出した。また僕は笑った。

その夕方、僕は早々と家に帰った。母さんが魚を揚げてくれていて、僕はサバを7匹食べた。父さんはビールを1瓶買っていた。僕は1杯だけビールを飲んだ。ジャガイモは昼間に茹でておいたらしく、ひんやりと冷たかった。それも食べた。僕はストーブの前で縮こまり、妹の本を手にとった。何も分からずに読み耽った。幸せだった。この幸せをあなたがくれたんだ。全てのものが前より数倍も好きになった。この原因はあなただ。けれど、こんなにも不運なのもあなただ。あなたを信じているし、あなたの友情も嬉しい。でも僕はずっとあなたのことを笑い者にしている。ストーブの前で眠る時も、その後ベッドで眠る時も僕は夢を見なかった。

朝、目が覚めるとすぐにあなたのことを考えていた。そして笑った。僕は早速このことをあなたに話しに来たんだ。どう思う？

ヤニ・ウスタ【「ウスタ」=「親方」「名人」の意。ここで
は職人一般への呼称として用いられている。】 “Yani Usta”

私がヤニ・ウスタと知り合ったのは、彼が 15 才の時だった。当時はまだヤニ・ウスタではなかった。黒い瞳、黒い足、黒い髪、褐色の少年だった。

私かい……？私はだいたい年を取っていた。嘘ではない。無為な生活を送っていた。この世に誰も私にはいなかった。母親が 1 人いるだけだった。彼女以外には誰もいなかった。ヤニ・ウスタは今 20 才だ。私は 50 に手の届く年になってしまった。しかし、ヤニ・ウスタは唯一の友人だ。どんなに壁にペンキを塗っても彼は貧しかった。私の目に映る彼はまだ 15 才の褐色の少年のまま。ペンキを塗らない時には映画を観たり、サッカー観戦をしたり、トランプをしたりしている。

彼は急に思い立つと、私がどこにいても見つけて会いに来た。もっとも思い立たなければ探しもしないのだが。

「何であんたを探しちまったんだろうな、親爺さん！」と彼は言った。

私たちには行き付けの静かなビアホールがある。私はそこへ行って座り、考え続けた。この世に私は何をなしたのか？この世で私は何をみてきたのか？何のために私は来たのか？そして何故去って行くのか？私は何をしてきたのか？

外で雪が降っていると、このビアホールが暖かくても私は寒さを覚えた。6 時にはまだ誰もいなかった。給仕は別のホールに行ってしまうていた。壁の時計は人を苛立たせ無理に酒を飲ませる。私はヤニを待っているのか？待ったところで来ないのだが……待たなければ来るのか？望みはある。私が待たなければ望みはあるのだ。

彼が私の前にやって来た。彼に何と言おう？彼は私に何と言ってくるだろう？何も思いつかない。後で彼は私にこう言った、というふうのでっち上げよう。

ビアホールには常連客がいる。そのうちの 1 人はやって来ると窓際に座る。ミネラル・ウォーターを 1 瓶空けさせ、その中にダブルの酒と 1 杯のラクを注がせる。1 皿の果物と腎臓のグリルを注文し、時々オムレツを食べる。

ヤニ・ウスタが来た。眉間には皺が寄っていた。娘の父親が 5000 リラの^{ドラマ}持参金^{非ムスリムの花嫁側の持参金}をくれるらしい。娘は美しかった。彼女を彼は昔から知っていたが、今度はお茶会で会ったのだ。娘の母親が「あなたたちダンスを踊ったらどう、ヤニ！」と言った。ヤニ・ウスタは答えた。「僕はダンスなんて知りません。知ってても踊りませんよ」。婦人は明らかに金を惜しまない態度を見せた。ヤニ・ウスタは「僕の父に会ってください」と言った。

つまり、ヤニ・ウスタはビアホールへ私のビールを 2 杯飲みには来なくなるのだ。彼は言った。「ビアホールや何かにはしばらく顔を出さない方がいいんだ。何せ 5000 リラがかかっているんでね」

ああヤニ！ 先日の夜私は思った 君は小さな褐色の痩せた少年だった。君は大人になり、私は年寄りになった。ビアホールもテーブルも昔のまま。けれど世界は別世界

だ。君も別人だ。しかし私はずっとあのままだ、ヤニ・ウスタ！君をいつもあの頃のまま
と思って見ているんだ、ヤニ・ウスタ。黒い髪、黒い瞳の賢く機敏な少年なんだ。君と映
画を観に行ったものだ。君は手を叩き、私の肩を叩いた。

「ウレシ！」と君は言った。「見たか？探偵を見ろよ！あいつが何したか見たか？一発のパ
ンチで……」

その映画館は映画館と呼ぶには相応しくなく、鏡張りだった。雨の日には布や人の匂い
がした。一等席の少年たちの間へ入っていった時、私の心は熱情で満たされた。どの顔も
美しかった。どの少年も気さくだった。どの手もマメだらけで小さく、汚れていて温かか
った。

日々は過ぎた。私は落ち込んでいた。飲む楽しみはすっかり台無しになった。君は大人
になった。5000 リラの持参金ドラホマを受け取るほどに。娘を愛しているのか、ヤニ・ウスタ？

「僕らは女が好きじゃないのか、親爺さん？」

その通りだ、ヤニ・ウスタ。もちろん女は好きだ。けれど、私は心がずっと子供のま
だからなのか、女よりも子供が好きなんだ。

「じゃあ僕を嫌っているのかい？」

「君をだって？そんなことを聞くのか、ヤニ・ウスタ？君を？君のことはとても好きだ」

「だけど僕はもう子供じゃないぜ」

「私の目にはそう見えるんだ」

「僕を子供扱いしたらあんたに腹を立てるぞ。二度と口をきかないからな」

「披露宴には呼んでくれるのか、ヤニ・ウスタ？」

「それには呼ぶさ」

ヤニ・ウスタと私はしばらく沈黙した。そしてヤニ・ウスタはどこから思いついたのか、
私にこう言った。

「あんた劇場とかに行くだろう。いつか夜に僕も連れて行けよ」

「喜んで。いつでも君の好きな時に……」

月曜日の夜に会う約束をした。私は劇場のチケット売り場に早々と立ち寄り、チケット
を買った。ヤニ・ウスタは着飾ってやって来た。しかし、チケットは明日の夜のものだっ
た。月曜の夜には公演がなかったのだ。

私は言った。「ヤニ・ウスタ、月曜日は公演がないらしい。明日の夜のためにチケットを
買ったんだが」

「かまわないよ。僕のチケットをくれ」

4杯ずつビールを飲んで別れた。翌日の夜、私は8時半に劇場へ行った。彼はまだ来て
いないようだった。開演ベルが鳴った時、隣に他の誰かが来て座った。

ヤニ・ウスタはチケットを売ってしまったらしい。劇場には来なかった。

ヤニ・ウスタは私に対して、最後に子供っぽい態度をとったのだ。気に入った。愉快的な

気分になった。けれど孤独を感じた。しかし、私は芝居をいつも1人で見ていたから楽しむことはできた。寂しい夜を選び、バルコニー席に上がって行ったものだった。その夜の公演ほど酷いものには多分もう二度とお目にかかれないうだろう。

ああヤニ・ウスタ！これはどうしたことだ？君は来なかった。こんなことをしてどうなるというんだ？通りで見かけた時、君はまだあの鏡張りの映画館で私の隣に座る幼い少年だった。私の心を何かが、鉄の掌が絞めつけていないわけではない。けれど、忘れてくれ！信じるな！落ち着け！悲しむな、ヤニ・ウスタ。私を見かけたら微笑んでくれ。気にするな！芝居が何だっというんだ？どんなことがあっても友情があるじゃないか！それは死んでいないだろう！

頭と瓶 “Kafa ve Şişe”

一日中、自分が何をしているのかも分からずに歩き回った。とっくに自分のしていることなど分からなくなっていた。しかし、こんなふうに歩き回っていると何かを見ることが出来る。そうでなかったら目を皿のようにして見開いても無駄じゃないか！こうして、私が入、物、事件をどれも万全な形で見て、感じ取ったとは言いきれない。むしろ私は、全く必然性のないことや些細なことを細かく見て感じ取り、全体像を見逃してしまうのだ。もし証人に呼ばれようものならまずいことになるのは明らかだ。通りで男がナイフを抜いて構えているところを想像してほしい。私はナイフを見ずにナイフを抜いた男の眉に釘付けになる。ナイフを刺された者の溢れ出る血や顔に浮かぶ苦痛を見ないで、それが適切かどうか考えもせずに他の何かを見る。

裁判官が「ナイフを抜いたのはこの者でしたか？」と質問してきたら、私はまず男の眉を見る。眉を何かの偶然で端から剃ってしまっていたら、「いいえ、この人ではありませんでした」と答えなければ嘘をついたことになってしまう。または裁判官に許可を求めて眉の周りが剃られていないかどうか調べるだろう。とまあこんな具合なのだ。私は証人としてはかなり問題のある男だったが、まさに私の作家という仕事にこの問題が影響を及ぼしている。昨晚、私はある喧嘩を目撃した。この時のことを話したい。彼らは4人の若者だった。彼らが酒を飲むために、私が食事を取るために入った食堂は、同時に居酒屋でもあった。平日だったので8～10席しかうまっていなかった。20席くらいは空いていた。ガラスケースになった冷蔵庫、または冷蔵庫になったガラスケースの前の、柱沿いにある2人掛けのテーブルに私は座っていた。私は1人だった。しかし、空想上の友人が向かいに座っていた。この空想上の友人をととても気に入っている。だから時々話していると唇に釘付けになりキスしたくなるのだ。その人の手も腫の色も大好きだ。私の心にその人から絶え間なく雨のように何か降り注ぐ。全く噂話もせず、お喋りではなく、唾を吐いたり体を掻いたりしない理想的な友人だ。男なのか女なのか、金持ちなのか貧乏なのか、教養があるのかないのか、それとも年寄りなのか？私の決めた通りになる。時にそれは化粧も飾りもない教養のある娘である。彼女ははきはきと話す。時にそれは美しい少年である。年は16、7才だ。教養はない。壁の塗装工でキリスト教徒だ。炭のように真っ黒な瞳を持っている。笑うと人間を超えた存在になる。見ていて飽きることがない。時にそれは60代の人生経験豊かな老人である。彼は大工仕事に機械仕事、ポスター貼りをしてきた。ピスタチオやメロン、スイカを売ったことがある。街角で栗やケバブを焼いていたこともある。金があれば、晩に酒を飲む。物語を次から次へと語って聞かせてくれる。英雄伝説、夫婦の物語、闘いや戦争の物語などをだ。先日、彼らのうちの誰と一緒にいたのか忘れてしまった。こうして私はこの空想上の友人と座って話をしていて。何を話題にして話していたかは分からない。突然、耳の端でビール瓶の落ちる音がした。冷蔵庫のぶ厚いガラス

の中で瓶は粉々に砕けた。

「おいこの野郎」と誰かが言った。「何で俺の目をじろじろ見てやがる？」

見ると、今しがた私が向かいに連れ出した黒い瞳の友人であった。

「まあ落ち着いて」と私は言った。「見たらいけないのかい？」

「見るというのにもいろいろあるだろ、親爺さん」

「気にするな。年寄りのことは放っておけよ。きっと君が誰かに似ていたんだ」

振り返って男の方を見た。驚いた！

彼も、私が 30 分前に話していたタートル顔の、硬くて白い髭を生やし、眉毛も睫毛もない小さな目の老人だった。彼は真っ青になり、恥ずかしさのために手がわなわなと震えていた。

いや、そうじゃない！違う、違う……。老人は「お若いの！兄弟！あんたきれいだ！」と言ったかと思うと……いきなり怒り出したのだった。

「何だ、こら！見たからってどうなるもんでもなし！そんなにびくびくしてるんなら居酒屋に来なきゃいいんだ。目は何も禁じられてねえ。きれいなものを見るのは善行だ！」と言って笑った。

「私の所に来ないか」と私は老人に言った。

老人を自分のテーブルに座らせ私も向かいに座った。次に私は若者の所へ行き彼をなだめた。そして老人のためにラクを注文した。

「だめだ。お前も飲め！」と老人は言い張り、気が鎮まったばかりの若者たちにラクを振舞いたがった。

「やめな。また別の晩に見かけた時にすればいい。あんまりしつこくしなさんな。ああいう若者連中は何しでかすか分からないよ」

「見たらどうなるっていうんだ？」と老人は言った。「俺は朝からずっと街から街へと『研ぎ師は要らんかね』と叫び続けているんだ。ナイフなんか怖くないね。毎日 80 種類もの刃物を相手にしてるんだぞ。怖いもんか！きれいな顔だったから見ただけだ」

「それでもだめだよ、研ぎ師の旦那！」と私は言った。「悪いのはあんたじゃないか」

彼はまじまじと私の顔を見て言った。

「おたく仕事は何だ？」

「仕事はしていない」

悪意のこもった目で、

「職もなくうろついているのかい？それはそれは！にしちゃあ身ざれいだ。まあいい。嘘をつかねえで答える。何の仕事をしてるんだ？」

「仕事はしているんだが、仕事とも呼べない」

「金は入るのか？」

「煙草代ぐらいいはね……」

「親父の遺産でもあるのか？」

「そんなところだ。話を引き伸ばさないでくれ。何で私の職業をここまで聞いてくるんだ？」

「あんた教養がありそうだから……」

「教養がありそうだから何だっていうんだ……？」

「教養のある奴は忠告したりしないもんだ！」と彼は言った。

「じゃあどうするんだ？」と私は言った。

「そいつを分かってやるんだよ」と彼は言った。「どうあってもな」

老人は給仕を呼んだ。若者たちにビールを1瓶送った。

「奴らに『研ぎ師の親爺から』と言ってくれ」

給仕は持って行きたくなかったために躊躇した。しかし仕方なくバルバ・ミハルは瓶を持って行った。

向こうのテーブルにいた髪の乱れたハンサムな若者が立ち上がった。給仕の運んで来たワインの瓶を手に持って、私たちのテーブルに向かって歩いて来た。私が前に立ちはだかると彼は笑って、

「いや、大丈夫だって。何もしねえから。祝って酒を飲もうぜ！」と言いながら、私を手で引っ掻くように押しやった。

何の音も聞こえなかった。頭に振りかかった鈍く大きな音も、頭にトクトクと空けられるワインの音も。後ろを振り返って見た時には、すでに後の祭りだった。若者がワインを研ぎ師の頭に浴びせかけたのだと思った。ワインは研ぎ師の親爺の白髪混じりの頭を流れていた。

研ぎ師の親爺は頭を手で覆った。給仕が「警察！」と叫んで飛び出していくと、親爺は手を頭から離した。

突然、彼の顔が真っ赤になった。テーブルを見ると、瓶は横に倒れ、ワインが床にこぼれ落ちていた。もう一度研ぎ師の親爺を見た。今度はよく見た。目の中まで血でいっぱいになっていた。

私は街へ出られない “Çarşıya İnemem”

さて、私は再び文章を書き始めている。何ヶ月もの間筆を取らなかった。筆を取ったところでそれで何かを生み出せただろうか？そうは思わない。まあいいさ！実のところこのことに満足しているんだ。しかし、今夜はなぜ何かがじっとものを書くよう私を駆り立てているのか？おまけにもう少し我慢すれば嘘をつくこともできる。未知の何かが私を駆り立てているとでも言うておこう。いいや違う。いつもこんなものだ。船を待っていて身動きがとれない時に私は文章を書く。

私がまるで誰かに「何を書いているんですか？」と聞かれて答えているかのような様子なのは気にしないでほしい。どのようにして自分が文章を書いているのか、私にはそれを知る術がない。私はこの夜をかき乱している。この黄色く分厚いざらざらした紙の前に、苦しみのあまり座っていることを白状しなければならない。苦痛の性質がどんなものであれ、それを脱する手段が他にあったにも関わらず、この苦痛よりもっと苦しいことになぜ取りかかってしまったのか考えようとしている。

これはもっともなことなのだ。なぜか？さしあたり読むべき本がある。金はなくとも家がある。ストーブが、食料がある。下の階にはラジオがある……。私は街へ出られない。しかし野山を歩けないわけではないんだ！帽子を被っていざカルパザンカヤ^{フルカズ島}_{の中の地名}へ。太陽が沈むところだ。ああ、気を付けて！「太陽が沈むところだ」の後には風景の描写が続く。私には波の色を染めたり、水平線を一切れのパンみたいに赤く焼き上げようなどという意図はない。

ほら！こうして私たちはまたするであろうことを繰り返してきたんだ。波の色を染め、水平線を見事に赤く色づかせてきた。

私たちはこんなものだ。悪い文学の作法を身に付けてしまった。どうしたものか？すぐに詩的な表現をしてしまう。

街へ出られない、と私は言った。なぜ出られないのか？まさに問題の核心部分はここにあるのだ。この数行の文章の中には私の打ち明けたくない、驚くべき秘密が込められている。この秘密の鍵は「街へ出られない」という言葉の中にある。君たちには私がどれほどこの未解決の問題を解明したがっているか分かりっこない。けれど、私の手には負えないのだ。いやいや、私もしようと思えばできる。しかし、それを書くことはできない。書いたら私は笑い者になるのではないか？笑い者になることに意味はあるのか？人は笑い者になるためには生まれてこなかったとしても、人を笑い者にするためには生まれてきたのだ。両者は同じ結果になったりならなかったりする。やられたらやり返す、というものですらない。それでも私はやり返す。私は誰かを笑い者にするのは全く好きではない。だが、自分は笑い者にされて嬉しいだろうか？そんなことがありえるのか？絶対に笑い者になどなりたくない。それならば君はなぜやり返すのか？自分の人間らしさをもっとよく味わうた

めだと私が言ったなら、君たちはこれを一連の病氣と結びつけて考えることはできない。もし病氣と結びつけて考えてしまうならば、全ての人間や動物には欠陥なんかはないってことになる！

今、私が君たちにこう言ったらどうだろう。私めは中流階級の役人でございます。手元には月に4、500リラが入る。娘が2人いて、あの学校で勉強している。私の妻は自己愛の強い派手好みのご婦人だ。受け取った金を家に持って帰る。私は金を全て月に1キロのラクに費やした。どうにかして手に入れた自分用の冷蔵庫があり、酒瓶はその中に詰まっている。月の始めに瓶の底から指2本分の酒を残しておいたものもある。ある晩などは、思いがけずやって来た友人に酒を振舞うという苦行に耐えるのだった。いずれにしてもだ！君は、私にはまだ他に悪い習慣があるのではないかと推測したことだろう。私はあちこちに少しずつ借金をしている。もちろん月の始めに返済することになっている。妻からちょろまかした63リラ85クルシほどの小遣い銭がある。先月、あり金を全て道楽に費やしてしまったから……、煙草屋には新聞とパフラ【煙草の産地パフラの名をとった煙草の商標】のつけが、ナイトクラブ経営者には2~3リラとソーダ水の借りが、乳菓子屋には17リラほどの小さな借金がある。

先月は返済せず、今月もやむにやまれぬ事情で56リラ支払わざるを得なくなったというのに街へ出ていけるだろうか？出られないだろう？そうだ。物語はこうして終わるのだ。笑う者は笑い、悲しむ者は悲しむ。「これで物語と言えるのか！」と言うものは言う。

あいつはもう書けなくなっている、と言って喜ぶものもいる……。しかしながら、ご存知のようにこの文章を書いている男は役人ではない。乾物屋やら煙草屋やらに借りを作らなければならないような状況になっても借金などしない。というよりできないのだ。借りを作ってしまうと、煙草屋もパフラを10箱以上は、ドンドゥルマ屋もドンドゥルマを3個以上は、カフェ店主もコーヒーを7杯以上はくれないものだ。従って借りは作れない。

私が街へ出られない理由はこれではない。これでないのなら何なんだ？私が街へ出られないことが君たちにとって問題なのか？全くそうは思わない。君たちにはどうでもよいことだ。このことを私が問題にしたことをよければ怒ってくれてもいい。だが、この文章を書き出すためには自分が街へ出られないということはとても、とても重要なのだ。なぜ街へ出られないのか説明しようとするの大変長くなってしまいう上に何の役にも立たない。私が誰にも会いたくないからだと思ってくれ。もういいだろう。

この話題は終わりにしよう……。街へ出られない、それだけだ。

ああ、この禁忌！私たちが私たち自身に、他人が私たちに、私たちが他人に、国家が国民に、国民が国家に、自治体が住民に、住民が自治体に置いた、また置くであろう禁忌……！

禁忌に取り囲まれた世界に私たちが生きていなかったとしても、禁忌なしでは生きられなかっただろう。しかし、動物、特に家畜は食べるための苦勞から出てくるかすかな、媚のような唸り声を除いては、いい気分で生きているではないか。私たちは禁忌を受け入れ

できた。人間に関して禁忌の動物とすることができる。細菌さえも1つ1つが禁忌だろう？愛は禁忌だ。水や果物さえ禁忌になる時がある。人々は互いに禁忌だ。

望んでいるからといって君に接吻することはできない、美しい少年よ！望んでいるからといって海よ、お前の中に入ることはできない。私の胸は弱い。医者への禁忌だ。望んでいるからといって泥酔し、気を失うまで酒を飲むことはできない。肝臓への禁忌だ。望んでいるからといって船に乗ってハイダルパシャまで、そこからさらに進んでヴァンまで行くことはできない。途中で私は死んでしまうだろう……。私は街へ出られない。街に神よ呪いあれ。カラマン人の乾物屋の口髭に真珠を通そうと思えば通せる。髪に金でめっきを施そうと思えば施せる。全身を銀でめっきさせることもできる。銀はたいしたことないだろう。

前菜屋が波止場で火を起し煙を出しながらソーセージを焼くと、猫たちが周りに押し寄せ、犬たちが吠え、松明が灯る。ソーセージやワインの他には目もくれず、40日40夜我がイスタンブールの避暑地村の猫、犬、ソーセージ、漁師、クルド人の荷担ぎ人足たちで陽気に騒いだなら、前菜屋の店はすっからかんになってしまう。41日目に、誰かがやって来て再びソーセージ、サラミ、ウィンナー、羊乳チーズとワインを買うのであれば40日も経たないうちにまた金持ちになれる。

こうして再び彼は太って、黒い口髭は芝生の匂いを、歯と汗はニンニクの匂いを、肥満腹はチーズの匂いを、前掛けは悪臭を放ち、手首が足首の太さもある状態で街を歩き回ることができる。

彼はパン屋じゃないか？彼は働く子供たちに鞭打つように、毎朝汚い油で揚げたボレッキを35クルシで売りさばき、多く渡し過ぎることを恐れて釣り銭を渡さないパン屋だ！彼はずらりと並んだ貸家を建て、自分の山羊たちに村中の若芽を食べさせるパン屋だ... ..！

彼は挽肉機を通った半キロごとの肉に、吐き気を催させるひどい脂肪を混ぜ、50歩先から匂ってくる椅子に晩までずっと座り、脂肪、山羊、水牛のことを考えている肉屋の主人じゃないか？こうした人々の顔を見ないようにするために街へ出ないのだと言っているみたいになってしまった。

いや違う、そうではないんだ！今街へ出て行けば、私が乾物屋に「やあバルバ・ニコ！」、肉屋に「やあハラランボ親方！」、パン屋に「おおアブドゥルカーディルさん！」と声をかけるのは確実だ。

それに街にいるのは彼らだけではない。我がカフェ店主イスカナヴィがいる。彼は世間のことに関心がない。金さえも金と呼ばないのだ。金のない時はいくらか不安げである。それは皆と同じだ。金のある時は大笑いする。彼にとって百リラ紙幣と十リラ紙幣の間に大きな違いはない。多くを望まない感じのいい男だ。彼はある戦争の間じゅう屋根裏に隠れていたことがある。停戦後、表に出て屋根裏で過ごした日々のことを語ってくれた。

困窮.....！戦時中、夏の家を貸しに出すことを余儀なくされた。妻は天井を見ては、ひ

とつも物音をたてずに暮らす夫に驚くばかりだった。ある日、流血沙汰が始まったことを聞いて彼は怒り狂った。また別の日、穴から借家人たちの食卓に投げ込まれたナイフがチーズの塊にいかにして突き刺さったか、借家人たちの目の前でチーズの塊が天井へ向かっていかにして上がっていったか、狂人でもないのになぜそんなことをしたのか　それらを借家人たちは彼の仕業と分かって食卓にイスカナヴィを毎晩招待するようになってから理解したのだった。

奴さん頭が切れるな！

そして床屋のヒルミさん……。利口そうな目、てっぺんの禿げた頭をひっさげて、若かりし頃の湿っぽい話を語り出さなければいいのだが。彼は人をひどく笑わせる。床屋が吟遊詩人に扮して吟じた見事な物語は、何事も成り行きと滑稽さによって穏やかに収め、冗談として聞き流し、抜け目のなさや洞察力で乗り切り、やり過ぎないということの　楽しくユーモラスな世界の形見である。

あとは誰がいる？牛乳屋のパンデリさんがいる。牛乳屋のパンデリさんの店には拳銃が1丁掛けられている。店へ夕方6時以降に入ってくる人々は皆、組織のメンバーだ。この組織は**爆発集団**だ。あらゆる類の爆発が許可されている。

その上、少々下品になるが、組織のメンバーは店に入るやいなや口で、または他のもう一方で爆発を起こさなければ、このゆっくりとしていて年老いた、人生経験豊かな野菜売り、料理人、庭師たちの会話に半分しか参加できない。爆発させると、パンデリさんは新参のメンバーに上座を与える。誰一人として笑わない。皆、爆発の激しさに目だけで大笑いする。

こうした彼らの目の中の笑いはだんだんと消えていった。日常の話題について話すようになった。日常の話題とは、金を稼いでも使わない者たちの愚かさについてだった。最後にこのような者たちの目を満足させるのは土であるという教訓とともに会話が締めくくられた。

街へ出なくなる訳なんてあったのか？私は組織のメンバーだ。床屋で私は髭を剃ってもらいながら物語を聞き、笑い過ぎてヘルニアになる。さもなくばイスカナヴィのカフェへ行く。

「じゃあイスカナヴィさん」と私は言う。「老婦人はチーズの塊が天井へ上がっていくのを見てどうしたの？」

「彼女は十字を切って『^{聖母}マリアム^様』、『^{ちよつと}ヴィレシ』、『カリオピ』と言った。ティンナーマティナフノイニ？」

「へえ、何でまたこんなことを公然とやったんだい？」

「退屈しちまったのさ。いい加減気付いてくれ、と思ってな。天井に男がいるんだと。夜、俺がどんなにうるさい音を立てても、かみさんも亭主も起きてきやしなかった。まるで死者が土を彼らの上に撒き散らしたみたいだったよ。たまに目を覚ますうちの女房に『ヴ

イレシ』と言ってきた。『カリオピ！天井に人間くらいの大きさのネズミがいるのかしら？』。彼らが、おかしなことになったとよそでも言うんじゃないかと心配になってね。天井にいるのがポンディカ（ネズミ）でないことを教えるためにこの方法を考えついたんだ」

そうだ。私は街へ出られなくなったのだった。今、目の前では蠅のたかる小さな 25 ワットの電球で照らされた街が煙っている。私は説明したい。街へなぜ出られないのかを。けれど何の役に立つ？誰が興味を持つ？

頭に帽子を被って、徳利のジャケットを羽織り、顔には歯が痛いかのように隔々までマフラーを巻き付けた。通りに出てカフェの前を通った。そこに、そこに彼がいた。

踵を返し、家へ戻った。ベッドにもぐりランプを消した。私は考えた。私を街へ出られなくしたのが誰であれ、そいつを殺そうと考えた。今までこんなことを考えたことはなかった。

服を着てもう一度通りに出た。カフェへ入った。彼の前へ行って座った。私を見ると真っ青になった。唇が震えていた。カフェの鏡に、顔色が悪く真っ白な 1 人の男を見た。驚いて跳び上がった。私だった。彼はカフェから出て行った。

「イスカナヴィ」と私は言った。「コーヒーをくれないか。あの屋根裏の話を……」

イスカナヴィは金がなく、むしゃくしゃしていた。

「あんたは裕福だ」と彼は言った。「俺の方は『デニネ』」

物語をこうして終わりにしよう。これが私の結びの言葉になり得る。なり得るが、だめだ。私は街に出ない。真っ白なカフェに入って会いたくない人間の前まで行くこともなければ、カフェ店主と話すこともない。

我が家の、自分の部屋にいる。私は街へ出られない。39 度の熱がある。寒くて震えている。しばらく私は嘆いている。母は渋い顔をしている。彼女は「もう書くのはやめて寝なさい」と言い、灯りを消して出ていった。私は周りに耳を澄ましている。カシュカダの犬はまだ吠えている。風は窓を打ちつけ、ドアをがたがたいわせている。私は灯りを点けた……。

これも締め括りの形ではあるが、これも違う。違う、これではない。私は街へ出られない。それだけだ。

蛇の眠り “Yılan Uykusu”

さあ君は彼と向かい合っている。彼も君と同じだ。手と足があり、眉と目があり、健康だったり病気だったり、金髪だったり褐色だったりする。頭、髪、睫毛、嘘をつく口がある。顔には喧嘩や石、転んだ時の小さな傷痕がある。悪戯小僧らしいものを少しずつ持っている。手、指、足がある。これは誰だ？人間だ！君と何から何まで全く同じだ。

ほら涙を浮かべたり、笑ったりしている。パンをかじっている。ほらポテトサラダを口に放り込んだ。フォークがサバに突き刺さっている。ワインのグラスを唇に当てている。その人間は君と全く同じだ。おまけに君は彼を愛している。唇の曲線を愛している。黒い髪を愛している。眉のうねりを、額の若じわを。

ほら君と全く同じだ。君は強い愛の高まりを感じる。彼は新聞を読んでいる。煙草の箱にサインしている。オレンジを食べている。歌を歌っている。君の知らない言葉で歌を歌っている。たまに君の知っている、君の血を流れるあのトルコ語で「カラベリム、プベリム、プベリム」と歌う。そして「アセピア ピルティ ケトン イブラヒム！」。さあ君は彼と向かい合っている。ほらさあ彼のことを知れ。理解するんだ。さあ自分のことを話せ。ほら彼は退屈している。深くため息をついている。煙草の箱に君の愛する指を伸ばした。君の愛する唇の曲線から煙が出ている。ほらさあ。彼のことを知れ。彼は誰だ？君のことをどう思っている？この時間にどこにいたいことを望んでいる？君の愛に関心はあるのか？

さあ知るんだ。「^僕の^黒胡^椒 浅黒い肌の少女への愛称」、カラベリム、どうしよう、どうしよう、憲兵たちがやって来るよ、さあ逃げよう」

さあ君は彼と向かい合っている。ほらさあ。君の言うべきことを言え。言うべきことを言うんだ。彼は聞いてくれる。楽しそうに聞いてくれる。愛を語れ。とにかく、彼が君を、ではなく君が彼を理解すれば何かが起きるんだ。

さあ君は彼と向かい合っている。君は突然立ち上がって彼の唇にキスする。彼は目を閉じる。見事に目を閉じる。多分君を見ないようにするためだ。君も目を閉じる。多分彼を見ないようにするためだ。君は彼を、彼は君を理解していない。おそらく理解することは君たち2人にとって都合が良くないのだ。「汝自身を知れ」。さあこの方法で取りかかってみる。そうすれば君は彼のことも理解するだろう！

突然、私たちのいる部屋のドアが開けられた。中へ風が入って来た。冷氣と一緒に葉の落ちた1本の木が入って来た。木の後ろから煙、煙の後ろから小鳥、小鳥の後ろから1つの雲が続いて入って来た。

そして……そして雪が降り始めた。書棚のガラス戸は氷が張り始めた。電球の光は氷の中を通り抜けると、凍えながら再び天井のほやへ入っていった。私の洋服のポケットは氷

でカチカチになった。手をポケットに入れることができなかった。ストーブはごうごうと燃えていた。ストーブの上の氷は溶けていた。さっきまで私の側にいた人間は今、隣の部屋に行ってしまった。彼は2つの部屋を隔てるドアを開けて私を見ていた。小鳥は木に止まって羽毛を毛羽立てながら座っていた。彼は小鳥に向かって口笛を吹いた。小鳥は返事をしなかった。彼は私の方を振り向いて「そこじゃ凍えるだろ」と言った。「こっちの部屋に来いよ」、「そっちの部屋は暖かいのかい？」と私が聞いたみたいに彼は「暖かいよ」と言った。「この部屋は暖まっている」。そして「君で暖かくなったのか？」と私が聞いたみたいに「そう、僕で」と言った。私はストーブを見た。ごうごうと燃えていた。きっとストーブのどこかが故障しているのだろうと思い管に手を伸ばして、すぐに引っ込めた。

彼は隣の部屋からまるで私を見ていたみたいに「ストーブは役に立たないよ！」と言った。

私は隣の部屋へ移った。ベッドが準備されていた。彼は隅っこにうずくまっていた。私は彼の側に行った。暖かかった。浴場ゆづりばみたいだった。「ストーブの部屋で一人きりで凍えていたよ」と私は言った。「ここは何て快適なんだろう……！小鳥はどうしてる？」と彼が言った。「木の上だ」と私が答えると、彼は「かわいそうに、凍えちまうよ」と言った。「あいつをここに連れて来いよ」、「今は小鳥のことなんか放っとけ！」と私は叫んだ。私の心に何かが生まれた。突然また全てに違和感を覚えた。彼の側は暖かかった。隣のストーブの部屋でストーブはごうごうと燃えていた。けれど書棚のガラス戸は氷が張っていた。そして部屋の中には枯れ枝に雪の積もった木があった。木の上には小鳥が止まっていた。小鳥は寒さで毛羽立っていた。朝まで生きられるかどうかというところだった。再び彼が言った。「小鳥をここに連れて来いよ！連れて来いしたら！」。私はいよいよ立ち上がってストーブの部屋に入った。小鳥を木から取り上げた。書棚のガラス戸の氷を爪で削った。ストーブを見ると火が消えかかっていた。1、2本薪をくべた。戻ってくると、ベッドは空っぽだった。彼はベッド際の置き棚の上に1枚の紙を残していた。手に取った。2つに折りたたんであった。開くと、何も書いていなかった。小鳥を置き棚の上に置いた。小鳥はさえずり始めた。この部屋はまだ暖かかった。まだ唇の曲線が、まだ悪戯小僧の風情の残る眉の毛のない傷痕が 部屋の中で、子供たちが授業中に作って投げた紙飛行機みたいに私の頭上に落ちてきていた。

私はベッドの上に座って煙草に火をつけた。隣の部屋の木は氷の張ったガラス戸をピシヤピシヤと叩いていた。私はストーブの音を聞いていた。自分のいる部屋のドアがノックされた。「お入りください」と私は叫んだ。緑色のレインコートを着た男が入って来た。

「どうぞ！」と私は言った。「誰にご用ですか？」。男はまじまじと私の顔を見た。そして辺りを見回した。「彼はどこですか？」と男は言った。「誰のことです？」と私が聞くと、男は「ついさっきまであなたと一緒にいた人ですよ」と言った。「分かりません。彼は出ていきました」と私は言った。

男は布団をめくった。私の顔を見て「どうして嘘をつくんですか？」と言った。振り返って見ると、彼はさっきうずくまっていた場所で眠っていた。すやすやと眠っていた。額に汗をかいていた。置き棚の上から小鳥が飛び立って彼の髪に止まった。静かな森のナイチンゲールみたいにさえずった。

私たちは男と隣の部屋に移った。今、部屋には雪がはらはらと降っている。男の緑色のレインコートと私のパジャマに雪が積もっていた。しかし私は寒くなかった。彼は両手に息を吹きかけて擦り合わせていた。

「彼は眠らせておきなさい。我々で話し合しましょう」と男は言った。私は「話すことなんか何もありません。それにここは寒い。私も寝なければならぬです。明日早くに起きるんでね」と答えた。

男の顔を怒りが覆った。手が震えていた。

「待って、怒らないでください。よければ話し合しましょう。ただ、何か着る物を取ってきます」と私は言って外へ出た。コートを着て戻って来ると、部屋は突然変わってしまっていて、いつも通りの部屋になっていた。男は長椅子にくつろいで座り、煙草を吸っていた。私を見ると「和解しましたよ」と言った。

「誰と和解したんですか？」と私が聞くと、男は「あなたと！」と言った。「いつ？」と私は尋ねた。男は微笑んで「小鳥が教えてくれました」と答えた。私は気が楽になった。小鳥が教えたとしても、きっと良いことを教えたに違いない。小鳥が悪いことを教えるだろうか？

「小鳥が教えてくれるんですか？」と私が聞くと、男は「もちろん教えてくれます」と答えた。子供の頃、「あなた今日学校で先生をからかったでしょ！恥ずかしくないの？」と母が言った。「嘘だ、母さん！」と私は言った。「誰から聞いたの？」「小鳥が教えてくれたわ！」と彼女は言った。「その小鳥は、ほらあの小鳥よ！」「全部教えてくれたの？」と私が聞くと、「そうよ」と答えた。

私は安心した。「小鳥が悪いことを言ったりするだろうか？小さな噂話に害はない。それならば……」。私は思った。「問題はない」「ないですとも！」と男が言った。「この煙草を吸ったら出ていきます」

書棚のガラス戸に再び氷が張り始めた。ドアが開いた。木が入って来た。木の後ろから小鳥が続いて入って来るだろうと思ったが、入って来なかった。しかし雲が入ってきた。

部屋がまた変わった。また寒くなった。今度は本の縁から氷柱が垂れ下がっていた。「まいったな」と一人呟いた。それでは男も変わってしまうのか。男は長椅子で縮こまり、手に息を吹きかけながら頭を振っていた。鼻が寒さのために真っ赤になっていた。けれど、私を見ると微笑んだ。変わっていなかった。ついさっきと同じだった。「さて、そろそろおいとましくなくては」と男が言った。「おやすみなさい！」

「おやすみなさい！」と私も言った。

隣の部屋に入るのは気が進まなかった。きっと彼も起きてとっくに出で行ってしまったはずだ。小鳥と一緒に窓から出て行ったに違いなかった。しかし、あの部屋はいずれにしても暖かいだろう。私は木を地面から引っこ抜いてバルコニーの扉から放り出した。煙と雲もその後が続いてひとりでに出で行った。

部屋が少し暖かくなった。ストーブはごうごうと燃えていた。電気の灯りを少し落として、隣の部屋に行った。布団をめくると、彼は隅っこにうずくまってすやすやと眠っていた。私は彼を抱き締めた。小鳥は彼の頭から私の頭へ、私の頭から彼の頭へと飛び移り続けた。朝まで小鳥の羽音と彼の寝息を聞いていた。

毛布 “Battaniye”

私はカフェに座っていた。突然ガラスの外に彼を見た。彼は笑っていた。私は矢のように外へ飛び出した。彼は映画館の入口に隠れていた。

「やあ」と私は言った。

「やあ！」

「私を探していたのか？」

返事はなかった。考えが次から次へと頭の中を巡った。「人はなぜ求められるのだろう？」と私は考えた。人はなぜ求められるのか。人は人をなぜ求めるのか？自分が学校の教師だったなら、この課題を生徒たちに出したことだろう。様々な動機が考えられる。私の場合にいちばん相応しいものを見つけた。しかし、深く考えることはしなかった。動機が何であれ結果を見てみよう。動機の美しさ、醜さ、純粹さ、不純さの重みは、結果の喜びにいつも後になって苦しみをもたらす。このことに疑いがなければ、言葉の大半は辞書から削除しなければならなくなる。純粹な動機が醜い結果を、不純な動機が美しい結果を生み出さないとと言えるか？生み出すのだ。純粹な動機で誰かを求めて悪い結果に終わったなら、その人を求めた動機が純粹なものであったと何パーセント信じることができる？もっと具体的に話そう。例えば彼が親しげに私の所へやって来たとしてもだ。ストーブの前で毛布を敷きくつろいでいた時に

「何か買ってきてくれよ。腹が減った。ワインも1本頼む。飲もうぜ」と彼に言われて、鳥みたいに飛んで行き欲しかったものを買って帰ってくると、ストーブの前の毛布であぐらをかいて座っていた彼の姿がもう見えなくなっていたりしたら、おかしくならないわけがないだろう？

不純な動機が彼を私の所にもたらしたにも関わらず、なおこの不純な動機のために彼は毛布の上で巻き毛の頭と賢そうな瞳で挿絵入り雑誌を読み耽っている。

外では雪が降っている。私たちの部屋は暖かい。そこらじゅうがめちゃくちゃだ。床は煙草の灰だらけだ。テーブルの上にはミカンの皮が載っている。彼は挿絵入り雑誌に釘付けになり、私は彼の顔に釘付けになった。私は災難を逃れ幸福という海に浮かぶぼろぼろのボートのようだ。帆は碎け散り、ボートは水浸しだ。いや、船頭のようにだと言った方がいい。彼は、一生のうち二度と見つけることのできない、見飽きることのない海の生き物みたいだ。海藻や貝殻の匂いがする。彼を私の所にもたらした動機が何であれ、この毛布の上の挿絵入り雑誌を読み耽る素晴らしい結果が 私を友情、熱情、20代、健康、幸福、親愛、安らぎへと導く結果が、こうして目の前にいる。これ以上何を望むだろう！

ストーブの中へ投げ入れた木がパチパチと音をたてて燃えている。ストーブだけが喋る部屋で、30分、1時間、1時間半、2時間後にはついに病氣、絶望、疑念、優柔不断を取り戻し、幻想と苦痛だけで満たされることになる人間が幸福に包まれている。

この幸福は1人の人間から生まれている。

「1人の人間が、1人の人間にこれ以上大きな安らぎをもたらすだろうか？」と私は考える。私は愕然としている。何かしらの悪しき考えを抱くことが大きな裏切りであるという結論に至ると、鳥肌が立った。恩 ああ、何て嫌な言葉なんだ、これは素敵なトルコ語でなければ 私の恩返しとして、今この時に彼のために死ななければならなくなり、このワインを飲んで死ぬのであれば、じわじわと、またはすぐにでも死んでみせよう。

「部屋が暑くなってきた。グラスに注いだからな。ワインは冷たいぞ。飲めよ」

彼は目を雑誌から離すことなく、私がグラスを彼の手に持たせた。

飲む前に本から顔を上げて、私の方を見た。

「あんたは飲まないの？」

「飲まないわけないだろ。飲むさ」

6年間飲まなかったワインを私の唇は欲望とともに吸い込んだ。ただ、喉を通る頃には何も感じていなかった。

カーテンに隙間を空けて見た。日が暮れていた。彼も雑誌から顔を上げて見た。

「日が暮れたね」と言った。

彼は横になった。そして眠った。

以前彼が誰なのか考えたことがあった。人間のうちの1人だった。ちょうど私と同じような。彼に危険なゲームを仕掛けている。彼は私と同じように明らかな不運に向かっていったのか？私たちはあるはっきりとした結末に向かっていった。しかし、青い海が黒く、緑の牧草地が黒く、山は越えられず、道は通れず、町は孤独に包まれ、果物は味気なく、ワインは苦い そんな国へと私は彼を引きずり込もうとしていたのか？この、ストーブだけが喋る部屋で2時間ともに過ごすことで、私の心に安心感、友情、自己犠牲の精神、人間性を生み出した人間を、私はどこへ連れて行こうとしていたのか？

彼は眠っていた。かしこそうな瞳に光沢のある滑らかな瞼が降りていた。首はねじれていた。両手は 意識のある間じたばたしていた両手は魂が抜けたようだった。彼を起こした。

「遅くなった。行こう」と私は言った。

「よければあんたはいなよ。僕は出て行く」

金をもらえないと思っていたのか、私が金を渡すと少し驚いた。

「あんたいい人だね」と彼は言った。

「違う。いい人なんかじゃない。善意で渡したわけじゃないんだ」

「じゃあ何で？」

「説明するのは難しいな」

「僕は分かった」

「分かるとうするな」

「二度と来ないでやろうか？」

「それ見たことか。分かっていないみたいだ。私はいつも君が来てくれることを望んでいるんだよ……。冬はこの毛布の上で君が眠っているのを、夏は岩の上に君が座っているのを、週に1回眺めるためにこうしたんだ」

「そんなこと今まで思いつきもしなかった」

「苦境に陥った時は、早いうちにそこから脱け出すに限るだろう」

彼はいきなり私の首に抱きついた。私は温かな人間らしい夢の中に落ちた。彼の頭は私の鼻先にあった。

「来週また来てくれ」と私は言った。

「ああ」と言って、彼は出て行った。

暖かい部屋でしばらくの間ぶるぶると震えていた。

私は理解した。全てを理解した。彼を（心の底から）愛していることを理解した。その時、彼は道を歩いていた。家路についていた。彼の心には奇妙な何かがあった。これはきっと、愛されていないことを知って生じた苦悩、または愛されていることを知って生じた悪意に違いなかった。

カリニヒタ “Kalinikhta”

辺りを見たが誰もいない。少し前は私の周りに人がたくさんいた。犬は吠え、木々はざわめいていた。私の耳の奥底を川が流れていた。木々は水を浄化していた。動物は人間にキスしていた。犬は会話し、人間は吠えていた。空は黄色かった。誰かが、

「君は私の命だ」と言った。「君は私の命、私の木、私の川 私の海なんだ」。もう1人は人間の匂いがして温かかった。彼は返事をしなかった。彼の手の上の青い静脈は友情の海へと流れ込んでいた。髪は黒く、瞳は黒く、黒い日々、黒い物語に満ちていた。唇にはこれから口ずさむ乙女の歌の風情があった。

ボートの中の陽射し、空の砂ぼこり、赤い木 月はどこから昇ってきたか？私の一方の唇は地面まで垂れ下がり、もう一方の唇は月の跡を追って私の内部から素早く移動していた。

「君が私の血管で、手首で脈打っている」

星たちが木々に吊るされた。冷気がランプみたいにぶら下がっていた。私の隣には無二の親友、杯には乳香入りのラク、私の口には^{くも}吃り、私の手には釣り糸、釣り糸の先には擬餌針、ボートにはバルバ・スタンチョ、ボートの欄干にはシブリ^ズ島、星たちは私の胸の中に 私は舵を取っている。モーターが音をたてている。犬の鳴き声が親しげに響いてくる。木々は星たちを、木々の頂きや犬の鳴き声は朝を連れてくる。私は魚の匂いをかいている。ギリシア人の家からはムール貝のフライの匂いが、自分の口髭からはアニスの香りが漂ってくる。

「君は私の命だ」と私は誰に言っているのだろうか？

私はコーヒーカップに落ちた朝の星の香りをかいている。コーヒーはえもいわれぬ良い香りがする。イチゴの木の花がはらはらと散っている。ラベンダーを手ですりつぶしている。私の舌に蜂たちがとまり、私の目を刺す。太陽は沈み、1羽の鷓鴣が物思いに耽っている。1羽のカモメが所在無く支柱にとまる。水の衣装をまとった透明な兵隊たちが小石の浜に上陸する。小石の浜に彼らの足音がこだまする。あれは、アスパシアじゃないか。彼女はアスパシアだ。ジャスミンの香りのアスパシア、樟腦の香りのアスパシア、復活祭の黄色い花に包まれたアスパシア。彼女の言葉には閃光、蛇、鏡、そして泉が……。

「君は私の命だ」と私は言う。「君は私の命なんだ」

ヤニ、ヤニよ！おいヤニ！褐色のヤニ！ベイコズ出身の手回しオルガン弾きパナヨットの孫、黒い瞳の我が友ヤニ！ギリシア語でカラビベリムの歌を歌えよ。アスパシアに聴かせるんだ。その歌に出てくるイブラヒムは私だ。イブラヒムも豊かさも忘れてくれ、カラビベリム。

友情の牧草地にいるこの子羊たちは誰のものだ？君たちのものか？彼らは子羊なのか？子羊はメーと鳴くかい？ヤニ、カラビベリムの歌を歌えよ。

今、アテネのオモニア広場は夕暮れ時だ。アテネのカフェテラスにあるアンチョビ、緑のオリーブ、1杯の乳香酒は誰の前に置かれている？誰の前でもいいだろう。ピレウスからクラゲの匂いが漂ってくる。アクロポリスからソクラテスが降りてくる。おいヤナキ！無二の親友よ！死ぬ間際の最後の友！アテネの通りを歩く時、星たちを見る。星たちは君をボートや汽船に乗せ島々へ連れて行くだろう。世界中の島々を見て回り、世界中のボートに乗るんだ。君は手に持ったナイロン 35 パーセントの釣り糸で、魚と思いついで海底から燐光やまばゆい光を釣り上げるだろう。魚のことは忘れてくれ！ヤナキム【原文では“Yanakimu”と“な”がついている。トルコ語の “Yanakim” と同様「私のヤナキ」の意】、私のことを考える。星の背中に飛び乗れ。島々の中にはブルガス島ブルガスがある。ちょうどカロエロスとレアンドロスの見えるところに1隻のボートがある。ほら、あれが私だ。私はボートのうちの1隻のボート、海のうちの1つの海、人間のうちの1人の人間だ。

ヤニ！オモニア広場は夕暮れ時だ。空をボートと歌声が横切る。馬車の上を光が滑る。馬の嘶きが聞こえたかい？君の頭の中を二頭立ての馬車が狂ったようによぎった……そしてオモニアのカフェのガラスにも？私はタクシム広場の記念碑の前にある芝生の短い鉄柵に腰掛けて君のことを考えているよ、ヤナキ。私は君のことを考えているよ、ヤナキ。夜になった。雪が止むところだ。ネオンサインは消え、草は黒くなった。タヴェルナから3つのギターの音が聞こえてくる。マヴロダフニは舗道でまいてる。ホテルまで歩いて行こうなんて思うなよ。アテネ・ピレウス間の地下鉄がとっくに閉まっているというのなら いい天気なんだ 歩けばいい。カモメたちはシヴリ島シヴリの月光の下で飛び回っている。バルバ・ヴァシリはオーバーの中にもぐって眠った。私は君のことを考えているよ、ヤナキ。そしてアスパシアの歌うケファロニアの旋律から生まれた風がシヴリ島シヴリの海を震え上がらせている。ヤナキ、オモニア広場の灯りが消えた。カフェは閉まるころだ。緑のオリーブを食べる。その酒を呑み込め。ピレウスから来た汽船の汽笛が聞こえたかい？その時私はガラタ橋にいた。オランダの貨物船がオクメイダヌをうろつく脱獄囚に悲しげに呼びかけていた。私はウスキュダル埠頭に行き、欄干に寄りかかった。君は緑のオリーブをなぜ食べなかったんだ？オモニア広場のエクセルシオール・カフェの給仕が、「カリニヒタ、キリオス」と私に言った。「私からも君にカリニヒタ、パンチョ！」